

2015年4月19日川越教会

全世界へ向けて

加藤 享

【聖書】使徒言行録 11章 19～26節

ステファノの事件をきっかけにして起こった迫害のために散らされた人々は、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで行ったが、ユダヤ人以外のだれにも御言葉を語らなかった。しかし、彼らの中にキプロス島やキレネから来た者がいて、アンティオキアへ行き、ギリシア語を話す人々にも語りかけ、主イエスについて福音を告げ知らせた。主がこの人々を助けられたので、信じて主に立ち帰った者の数は多かった。このうわさがエルサレムにある教会にも聞こえてきたので、教会はバルナバをアンティオキアへ行くように派遣した。バルナバはそこに到着すると、神の恵みが与えられた有様を見て喜び、そして、固い決意をもって主から離れることのないようにと、皆に勧めた。バルナバは立派な人物で、聖霊と信仰とに満ちていたからである。こうして、多くの人々が主へと導かれた。それから、バルナバはサウロを捜しにタルソスへ行き、見つけ出してアンティオキアに連れ帰った。二人は、丸一年の間その教会と一緒にいて多くの人々を教えた。このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである。

【序】歴史の主演は誰か

歴史の主演は誰なのでしょう？多くの人々が知恵と力の限りを尽くして、生き、活動して社会を動かしています。その総体として国家が形成され、競い合い、ぶつかり合い、生存をかけて戦いを繰り返します。そして勝ち残ったものが主導権を握って、歴史を綴ってきました。

キリスト教はユダヤ教から生まれました。始祖アブラハムは「**地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る**」との言葉と共に神に召されたのですが、**ユダヤ教**はユダヤ民族の枠組みに組み込まれた信仰でした。ユダヤ人以外の者が入信しても、エルサレムの神殿では中庭を囲む石壁の内側に入ることを許されません。**異邦人信者**は何時までも差別され続けていました。

全世界の救い主イエス・キリストも、ユダ族の末裔として小さな田舎町ベツレヘムの家畜小屋でひっそりと誕生しました。しかし成人してから開始した**福音の宣教活動**は、律法を厳格に守ろうとするユダヤ教の信仰を自由に乗り越え、**全ての民を包み込む救いの業**でした。そのためにユダヤ教指導者たちから

否定され、エルサレム神殿の郊外ゴルゴタの丘で**十字架**にはり付けられて、30 余才の短い生涯を閉じ、墓に葬られてしまいました。

しかしキリストは三日目に墓から**復活**して、弟子たちに「**全世界に行って、すべての造られたものに福音を伝えよ**」とお命じになりました。そして 40 日間にわたって弟子たちの信仰を確かなものにしてから、昇天されました。それから 10 日後、エルサレムの信者の家に集り祈っていた弟子たちに、主の約束通り**聖霊**が豊かに降り、彼らは**イエス・キリストの福音**を、恐れずに**堂々と宣教し始めた**のです。しかしユダヤの都とはいえ**エルサレム**は、大ローマ帝国内では東の片隅の属国の都市に過ぎません。そこから**全世界に向かって**、どのように福音が広がっていったのでしょうか。その記録が**使徒言行録**です。

私たちは、**福音**がエルサレムから**全世界に拡がり始めていく過程**を読みながら、**歴史の主役は誰か**について、学ぶことにいたします。

[1] 新しい歴史の始まり

先ず第一に**ステファノの殉教の死**が挙げられます。彼は大祭司たちに向って堂々と説教をした結果、石打の刑に処せられてしまいました。そしてエルサレム教会に対する大迫害が起こり、信者は使徒を除いて皆**地方に散らされました**が、彼らは行く先々で福音を宣べ伝えました。しかし**ユダヤ人以外の誰にも御言葉を語っていません**。(使徒 11 : 19)

一方熱心なユダヤ教徒の青年**サウロ**は、**迫害の急先鋒**として家から家へと押し入り、男女を問わず引き出して牢に送りました。そして更に大祭司の許可を取って、シリアの**ダマスコ**にまで乗り込んで行きました。しかしその途中で突然天からの光に打たれ、**地に倒れ伏して**、目が見えず、食べも飲むことも出来なくなってしまいました。そして**復活のキリストの声**を聞きます。**劇的な回心**がサウロに起こったのです。彼はダマスコの信者アナニアに祈ってもらい、心と体の目が開け、バプテスマを受けてキリスト信者に転向しました。この出来事の次第については、先週山下先生が説教されました。

さて迫害でエルサレムから散らされた信者によって、北約 500 k mシリアの**アンティオキア**にも教会が誕生しました。ここは地中海沿岸の小アジア地方の人々やキプロス島からも人々が集まるローマ帝国内でローマ、アレキサンドリアに次ぐ**世界第三の大都市**です。ギリシャ語を話すユダヤ人信者が、ギリシャ人にも積極的に伝道したので**ユダヤ人・異邦人混合の教会**が誕生しました。

そこで成り行きを心配したエルサレム教会は、**バルナバ**を監督者として派遣しました。しかしバルナバは、大都市に生まれたこの国際的教会の信仰を**神の恵みと評価して喜び**、教会を励ましました。そして出身地小アジアのタルソスに戻っていたサウロを捜し出し、協力してアンティオキア教会の牧会伝道に当たりました。

こうして無視出来ない社会的集団になって来た教会員たちを世間は**キリスト者**と呼び始めます。この人たちが単なるユダヤ教の分派ではなく、キリストを語り伝え、賛美している姿を見聞きしたからでしょう。そしてこのアンティオキア教会から、バルナバとサウロが**世界宣教に送り出される**ことになったのです。**新しい歴史**の始まりです。

[2] ペトロの限界

墓から**復活**したイエス・キリストは弟子たちに「**全世界に行って、すべての造られたものに福音を伝えよ**」とお命じになり、そのために弟子たちに**聖霊**を豊かにお注ぎになりました。そして弟子たちによる福音宣教活動が開始されたのです。としますと**ペトロ**を中心とした使徒たちによって、**エルサレム教会から世界宣教**が進められるべきではなかったのでしょうか。

確かにペトロはカイサリアに出かけて行って、イタリア隊の隊長コルネリウス一家とそこに集る人々に伝道して改宗させています。祈りの中で不思議な幻を三度も示され、「どんな人をも汚れていると言ってはならない」という神の声を聞き、外国人との交際を禁じる**律法を超えて行動する**ことが出来たのです。果たしてエルサレム教会に戻ると、「異邦人と食事を共にした」と非難されましたが、聖霊の導きとその働きをきちんと報告して了解してもらっています。

しかしペトロは、後にアンティオキア教会を訪問し異邦人信者とも一緒に食事をしていたのに、エルサレム教会から信者たちがやってくると、彼らに非難されて面倒が起らないようにと、一緒に食事から身を引いてしまい、サウロから「**福音の真理にのっとなってまっすぐに歩いていない**」(ガラテヤ 2:14) と非難されています。割礼を受けていない者を異邦人として**差別視**する律法の教えを克服することは、ペトロにとってすら容易ではなかったのです。

そこで歴史に登場して来たのが青年**サウロ**です。しかし彼は熱烈なユダヤ教徒であり、クリスチャン迫害の急先鋒です。このような人物が、正当な信仰に反する偽キリストとして**十字架刑に処せられたイエスの教えを世界に広める**

立役者になるなど、誰も思いつかない事ではないでしょうか。どうしてこの彼に**劇的な回心**が生じたのでしょうか？

その**原因**については聖書のどこにもはっきりと記されていません。しかし私は、彼が身近に立ち会った**ステファノの殉教の死**ではなかろうかと推測します。ステファノは「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と叫んで眠りにつきました。これは十字架上の**主イエスの祈り**と同じです。(ルカ 23 : 34) この祈りが、サウロの心に**大きな衝撃**を与え、**聖霊の働きかけを受ける素地**になったのではないのでしょうか。十字架上で主と共に働いた**聖霊**が、ステファノの死に際しても働き、そして迫害者サウロにも働き始めたのではないのでしょうか。

【3】協力者バルナバ

次に**バルナバ**の存在です。バルナバは祭司が属するレビ族の一員ですが、**キプロス島生まれ**です。**サウロ**はベニヤミン族の一員ですが、キプロス島が面している小アジアの**タルソス**で生まれ育ち、生まれながらローマ市民権も与えられていました。そのため両者ともにギリシャ語も話せる**国際性**を持っていたと思われます。しかしサウロは律法に厳格な**ファリサイ派**に属し、エルサレムに上って律法教師ラビになる教育訓練を受けていました。

キリスト教に改宗したサウロは、**直ちにダマスコ**で福音宣教を開始しました。それから**エルサレム**に上って、弟子の仲間に加わろうとしましたが、恐れられて受け容れてもらえません。その時**バルナバ**が彼を信じて、使徒たちの許に連れて行き、彼の回心とその後のダマスコでの宣教活動を紹介しました。その結果サウロはペトロ、主の兄弟ヤコブと交わることが出来て、エルサレムでも宣教する機会を与えられたのでした。しかし彼に裏切られた**ユダヤ教徒の敵意**が激しく、身の危険が迫ったので、郷里のタルソスに戻りました。

バルナバは、エルサレムでのサウロとの出会いを通して、サウロの福音宣教者としての**優れた資質**と**信仰**をいち早く理解したのでしょう。そこでアンティオキア教会を助けることになった時、**タルソスまで出向いてサウロ**を探し出し、二人で力を合わせてアンティオキア教会を大きく成長させました。そしてこの教会に世界宣教の働きが示された時、二人がペアを組んで送り出されることになったのでした。

さて**第一次宣教旅行**の記事を読みますと、**バルナバとサウロ一行**という記述が、途中からサウロがパウロと呼び名が変わり、**パウロとバルナバ**と順序が変

わっています。(使徒 13:13) すなわちパウロが名実ともに**リーダー**になったことを現しています。しかしバルナバはその変化を受け容れ、淡々としてパウロと共に宣教旅行を続けました。

ところが**第二次宣教旅行**の出発に当たって、マルコを同行させるかどうかについて、二人の間に**意見の対立**が生じました。パウロは先の旅行の途中で勝手にエルサレムに戻ってしまった者を除こうとしました。バルナバはもう一度機会を与えて、マルコを育てていきたいと願いました。パウロは頑として拒否します。遂に二人はそれ以後、**別行動**をとることになってしまいました。

パウロは劇的な回心をしたとはいえ、キリスト教徒迫害の急先鋒だったので。バルナバのお蔭で、ペテロたちと交わることが出来ました。バルナバがアンティオキア教会に招いてくれたので、遂に**世界宣教という大きな使命**を果たす機会が与えられたのです。言わば**人生の大恩人**です。マルコを何とか育てたいとする**バルナバの思い**を尊重して然るべきだったと思います。

しかしバルナバは偉いですね。パウロへの**友情と信頼**をその後も変えませんでした。後にパウロがローマで監禁されていた時に**マルコが彼の傍に仕えています**。(コロサイ 4:10) パウロから**駄目な男だ**と否定されたマルコが、どうしてパウロに仕えているのでしょうか？ バルナバはひ弱な従弟のマルコを一人前の信仰者にしたいと願いましたが、パウロの賛成を得られず、別行動を余儀なくされたのです。恩人に対して失礼ではないかと**マルコのパウロ嫌い**は募ったことでしょう。

ここにバルナバのマルコ教育の素晴らしさを見出します。「全世界にキリストの救いを」という主イエス・キリストのご命令に献身している**パウロの働きの大切さ**をバルナバは、私情に捉われずにマルコに繰り返し教えたに違いありません。恩人のバルナバと別行動をとった**パウロの頑固さ**は、確かに困ったものです。でも**この頑固さゆえに**、どんなに迫害を受け、艱難が続いても、病弱な体を持ちこたえて、パウロは世界宣教の使命を果たし抜いたのです。**長所と欠点は紙の表裏だ**と言われますが、本当にそうですね。だからこそ私たちも、**バルナバの心**を持たなければならないと深く思います。

【結】 人の一步一步を定める主

「全世界に行って、すべての造られたものに福音を伝えよ」と復活されたイエス・キリストは、弟子たちにお命じになりました。そして五旬祭の朝、祈

る弟子たちに約束通り聖霊が豊かに注がれました。弟子たちは、恐れることなく堂々と**福音を宣教し始めました**。この弟子たちへの迫害が起こります。信者はエルサレムから地方へ散らされて行きました。

しかし**ステファノ**の殉教の死が、迫害者**サウロ**の心に大きな影響を与えました。彼はシリアのダマスコに乗り込む手前で劇的な回心を経験します。彼は、**アナニア**の祈りによってキリスト信者に改宗するや、直ちに「イエスこそ神の子である」と宣べ伝え始めました。サウロがエルサレムに戻り、ペテロたちに会おうとしましたが相手にされません。すると**バルナバ**が仲介者として登場します。

福音はエルサレムの北 500 k m、世界三番目に大きな国際都市**アンティオキア**にも及び、ユダヤ人・異邦人混合の教会が誕生しました。異色の教会の誕生を心配したエルサレム教会はバルナバを監督者として派遣しました。ところがバルナバは、国際色を持つ教会を神の恵みと喜び、タルソスからサウロを連れ出して来て、一緒に教会の成長に仕えました。そしてそのアンティオキア教会から、**バルナバとサウロが世界宣教に送り出されたのです**。

世界宣教の立役者はサウロ、後のパウロだと言われますが、彼が活躍するに当たって、ステファノが、ペテロが、またバルナバの役割りが欠かせませんでした。彼らは**福音宣教の大きな筋書**を知らずに、選ばれて、与えられた**役割り**を果たしたに過ぎません。

としますと**世界宣教の主役は神さま**——神さまがその時その時に**必要な人材を選んでお用いになり**、全世界に福音を宣べ伝えさせていかれたと言わざるを得ないのではないのでしょうか。まさに箴言 20 : 24 通りです。「**人の一步一步を定めるのは主である。人は自らの道について何を理解していようか**」ですから、**歴史の主役は神さまだ**と言わずにはおれません。

では私たちはどうすればよいのでしょうか。ペテロの手紙 I にこう述べられています。「あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、**神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい**。語る者は、神の言葉を語るにふさわしく語りなさい。奉仕をする人は、神がお与えになった力に応じて奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して、**神が栄光をお受けになるためです**。」(4:10~11)

私たちは皆、神さまの御用を果たす力を頂いています。その賜物を生かして **互いに仕え合う時に**、その働きが神さまに用いられて、福音の恵みを世界の全ての人に及ぼそうとされる **神のご計画**が進められることになるのです。ステファノのような殉教はなるべく避けたいですね。でもバルナバのように、他の人の賜物が活かされるように助けるは働きなら、喜んでさせて頂きたいものです。

お祈りします

自分の力に任せて自分の考えを押し通そうとすれば、私たちは必ず罪を犯してしまいます。神さま、貴方の御心を絶えずたずねながら、御心が成ることを求める者にしてください。共に生きる人の賜物がよりよく発揮されるように、どうぞこの私をお用い下さい。そしてイエスさまのご栄光が輝く生き方をさせてください。イエス・キリストの御名によってお祈りします。 アーメン